

2 エデンのあずま屋

アダムの前妻 リリスには

(うたえ エデンのあずま屋よ)

人の血は一滴も流れていなかった

だが その^{すがたかたち}姿形は柔らかく美しい女

リリスはエデンのはずれに立った

5

(ああ その^{とき}瞬間よ)

リリスはエデンから最初に追い出されたもの

リリスには地獄 イブには天国

リリスは^{へび}悪魔の^{ささや}耳に囁いた

(うたえ エデンのあずま屋よ)

10

「休息が終わって あなたのところへ戻ってきたの

あなたが恋人だった頃 わたしは蛇だったわ

「エデンで一番美しい蛇だったわ

(ああ その^{とき}瞬間よ)

地上の意志で 新しい^{すがたかたち}姿形が与えられ

15

地上の新しい生き物の妻となったのよ

「アダムのもとから戻ったからには わたしをあなたのものにして

(うたえ エデンのあずま屋よ)

わたしの愛でもう一度あなたを虜にするわ

過去は過去 わたしは戻ってきたのよ

20

「ああ アダムもリリスの虜だったわ

(ああ その^{とき}瞬間よ)

わたしの^{こがね}黄金色に輝く髪

アダムの心はその網に^{から}搦め取られていたわ

「ああ リリスはアダムの女王だったわ

25

(うたえ エデンのあずま屋よ)

昼も夜もいつも一緒

わたしの息はアダムの魂を^{はね}羽毛のように震わせたわ

「アダムとリリスのすばらしい快樂

(ああ その^{とき}瞬間よ)

30

幾重にも絡みついた蛇の甘美なとぐろ

心に心を重ね ため息をつき恋い焦がれたわ

「リリスとアダムの可愛らしい子どもたち

(うたえ エデンのあずま屋よ)

森や川でとぐろを巻いたその姿

35

光り輝く息子たち まばゆいばかりの娘たち

「ああ 神よ エデンの神よ

(ああ その^{とき}瞬間よ)

この美しい^{からだ}身体は男のためだったのに

アダムの^{からだ}身体から別の女を創るとは

40

「ああ ^{へび}悪魔よ エデンの王たる^{へび}悪魔よ

(うたえ エデンのあずま屋よ)

われらの首も神の強靱な意志に抑えつけられているけれど

あなたとわたしと二人して そのくびきを粉々に砕いてやるわ

「手伝っておくれ ^{いと}愛しい^{へび}悪魔よ リリスの^{いと}愛しい恋人よ

45

(ああ その^{とき}瞬間よ)

神に知らしめてやるわ

神に似せて創られた男を わたしがどんなに愛し憎んだか

「一度だけ イブとアダムへの復讐を手伝っておくれ

(うたえ エデンのあずま屋よ)

50

一度だけ この企みを手伝っておくれ

そうすれば わたしの愛は永遠にあなたのもの

「強大な神がリリスの恐ろしい敵

(ああ その^{とき}瞬間よ)

天にも地にも 神を^{おびや}脅かすものはないけれど

55

あなたとわたしの二人なら 神を打ち負かしてもできるわ

「強大な神がエデンの偉大なる神

(うたえ エデンのあずま屋よ)

創りしものすべてにその威力を振るうもの

でも ひと時だけ あなたの姿を貸しておくれ

60

「リリスへの愛の証^{あかし}に あなたの姿を貸しておくれ

(ああ その瞬間^{とき}よ)

見て わたしの唇と頬の赤らみを

あなたの身体^{からだ}は冷たくとも わたしの身体^{からだ}は炎と燃える

「アダムへの恨みを晴らすため あなたの姿を貸しておくれ

65

(うたえ エデンのあずま屋よ)

アダムを見捨てたわたしの喜びを嘆くがいい

新床で眠りについたあの日をアダムは呪うがいい

「エデンの恥をさらすため あなたの姿を貸しておくれ

(ああ その瞬間^{とき}よ)

70

女の愛が憎しみに変わるとき

敵なる神さえ敵なる男と同じくらい弱いもの

「リリスの心からの願いを わかってくれるわね

(うたえ エデンのあずま屋よ)

だったら ぬらぬら光るその頭を胸元に近づけて

75

わたしの胸に唇をはわせて よく聞いて

「わたしはきれいかしら エデンの愛しい悪魔^{いとへび}よ

(ああ その瞬間^{とき}よ)

だったら 口からもれる生暖かいささやきに耳を傾け

わたしたちに何ができるか考えて

80

「神がアダムに言うのを聞いたでしょう

(うたえ エデンのあずま屋よ)

『おまえをエデンのすべての富の番人としよう

エデンに育つ木の実なら 何を食べてもかまわない

- 『エデンで食べてはならぬ木はひとつ 85
(ああ その瞬間よ)
そのひとつを除けば すべてはおまえの自由意志
だが 善悪を知る知恵の木の実^はは食べてはならぬ』
- 「恋人よ もっとリリスの近くに来て
(うたえ エデンのあずま屋よ) 90
いと
愛しいとぐろでわたしを巻いて縛って
借り受けるその姿を わたしに感じさせて
- 「あなたの姿で わたしはエデンへ戻るの
(ああ その瞬間よ)
あの知恵の木に巻きついて 95
冠を頂いたこの頭を果実の側へ^{そば}と伸ばしておくわ
- 「見て リリスが息を吹きかければ イブは意のまま
(うたえ エデンのあずま屋よ)
わたしの心はその炎の糧となり
イブの血を求めるわ 100
- 「見て リリスが言葉をかければ イブは意のまま
(ああ その瞬間よ)
『この木の実はだめですって なぜ嫌がるの
食べた^ら死神が生まれるとでもいうの
- 『大丈夫 エデンの偉大な日に 105
(うたえ エデンのあずま屋よ)
この知恵の木に助けられて
おまえが神と同じになることを 神も知っておいでだわ』
- 「そうして イブに食べさせ アダムにも食べさせるのよ
(ああ その瞬間よ) 110
そうして二人に知らせてやるの 自分たちが裸だと
わたしの心が痛んだように 二人の心も痛むがいいわ
- 「そうよ エデンの森で二人に身を隠させるのよ
(うたえ エデンのあずま屋よ)

エデンの涼しい朝方に 115
神は二人に情けも赦しもかけずに歩き去ってゆかれるわ

「お聞き イブよ アダムの心の声を
(ああ その瞬間よ)

アダムの最も勇敢な言葉をお聞き
『これは あなた様から賜ったあの女がくれたもの』 120

「イブは何と言うかしらね 聞こえるようだわ
(うたえ エデンのあずま屋よ)

この心を満たす言葉こそリリスへのご馳走よ
『これは 蛇がくれたから食べたのです』

「ああ 高慢なイブよ おまえのアダムにひしと寄り添い 125
(ああ その瞬間よ)

アダムが名付けた獣のように
永遠に炎吹き出す剣で追い出されておしまい

「知るがいいわ イブの辿る道はリリスにはお見通し
(うたえ エデンのあずま屋よ) 130

昔 婚礼には陽気な鳥がうたったけれど
今は 涙が行く手に山査子を繁らせる

「ああ 恋人よ エデンの愛の神たる悪魔よ
(ああ その瞬間よ)

ねえ 今日と明日 135
絡みつきを弛めて わたしをおもいっきり笑わせて

「輝く悪魔よ アダムの死神よ
(うたえ エデンのあずま屋よ)

わたしの黄金色に輝く髪をあなたの首に巻きつけて
わたしとあなたの黄金色を絡ませておくれ 140

「その日 エデンのはずれで
(ああ その瞬間よ)

あなたの姿であなたのもとへ戻って来るわ
一瞬だけ 蛇のままの姿であなたを見るわ

「でも あなたはあなた リリスはリリスとして 145
(うたえ エデンのあずま屋よ)

見たことも聞いたこともないような この上ない至福の中で
お互いに相手を飲み干すのよ

「『イブ』『エデン』『アダム』と叫びながら
(ああ その瞬間よ) 150

二人の愛撫を絡ませ合うのよ
あなたのとぐろにわたしを わたしの髪にあなたを

「彼らの名前とエデンの木霊で
(うたえ エデンのあずま屋よ)

燃えさかるわたしの心から炎が叫ぶわ 155
『アダムは塵 塵は塵に帰れ』

「でも今日 あなたはこのリリスの主^{あるじ}
(ああ その瞬間よ)

わたしが借りるその姿で わたしを抱いて
楽しい明日を語らせて 160

「エデンの東 緑の繁る庭
(うたえ エデンのあずま屋よ)

川が流れ 庭を潤^{うるお}すその場所で
泉は涸れ 土は固くなる

「そうよ アダムが婚礼の眠りについたその場所で 165
(ああ その瞬間よ)

誰にも聞こえぬ嵐のうなりが
山査子^{さんざし}とアザミに囲まれて枯れたバラの間を吹き抜ける

「そうよ エデンの東門は
(うたえ エデンのあずま屋よ) 170

神が二人を娶^{めあわ}せて 誰も引き離しはできないところ
この道あの道 剣^{つるぎ}が永遠^{ひるがえ}に 翻る

「エデンから追放されて アダムはどうなるかですって

(ああ その瞬間よ)

見て 影のようにつきまとう憂い^{うれ}に震え 175
アダムは自らが創られた固い大地を耕すわ

「エデンから追放されて イブはどうなるのかですって

(うたえ エデンのあずま屋よ)

いいえ 彼女は神が贈った妻だから
すべての人間の母となる定め 180

「見て 神かけて いいえ このリリスにかけて

(ああ その瞬間よ)

わたしとあなたの楽しい明日から
イブの腹に神が悲しみをいや増す定め

「強く抱いて エデンの神たる悪^へ魔^びよ 185

(うたえ エデンのあずま屋よ)

あなたを駆り立てるのに 愛以上の報いなどありはしないわ
言った通りに わたしの身体^{からだ}に絡みついて口づけして

「見て イブとアダムの二人の子ども

(ああ その瞬間よ)

いと愛^{いと}しい悪^へ魔^びよ 苦勞でもあり宝でもあるその子らを
快樂で生まれた二人の人間の子を見て 190

「上がカインで 下がアベル

(うたえ エデンのあずま屋よ)

一方の魂はあなたのものとなり 195
あなたの口は もうひとりの血を啜る定め」

(ああ その瞬間よ)

(中島久代訳)